【特 集】

今こそ、アドベンチャートラベル！

――ブラジル マーク博士のまなざしを追って

アドベンチャートラベル（AT）とは、
ヨーロッパ、北米、オーストラリアを中心とする富裕層に広がっている旅のスタイル。
ネイチャーガイドとして世界の自然を知り尽くすブラジル マーク博士によると、
北海道の自然景観や野生生物の多様性は、世界第一級の価値があるという。
昨秋には、「アドベンチャートラベル・ワールドサミット北海道・日本（ATWS2023）」が開かれた。
勢いを増す北海道のATの魅力を探った。

ワールドクラスの自然

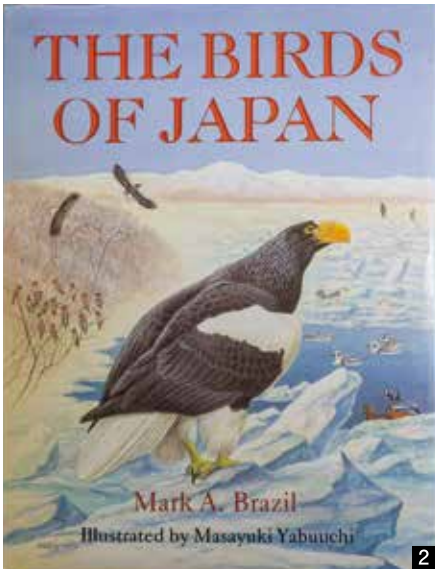
十三歳のブラジル マーク少年は、オオワシの写真に釘付けになった。黒と白と黄色の鮮やかなコントラスト、鋭い眼、翼を広げると二・五メートルにもなるという。Wow（ワオ）！しかし、オオワシが見られるのはロシア極東と日本の北部のみ。世界地図で確かめると、少年の住むイングランドからは一万キロの彼方だ。一生、会えないと思いながらも、少年は大学に進学して鳥類学を学び、博士号を取得。そしてブラジル マーク博士となって、オオワシが舞う北海道の大学教授になった。少年は夢を叶えたのだ。

もっとも現在、博士の行動範囲はそんなものではない。世界中をフィールドに、ネイチャーガイドや講演、執筆を行うナチュラリストとして、作家として、水平方向には北極から南極まで、垂直はヒマラヤ山脈まで。今年だけでもタンザニア、セーシェル諸島、スコットランド、ブリテン諸島へ行き、コスタリカ、チリへも渡航予定だとか。

そんな博士にとって、ATは、そ

（写真上）日本海（利尻水道）の彼方にそびえる利尻山を眺めながらサイクリング。アクティビティの背景に世界第一級の自然景観が広がる。写真提供＝北海道観光機構

文＝北室 かず子
写真＝田渕立幸



1 ブラジル マーク博士（姓はブラジル）は、1955年英国生まれ。1998年、北海道に移住後、9年間酪農学園大学で教鞭を執り、2007年からは旅行会社や自然番組制作のコンサルタント、ナチュラリストとして世界中を旅している。2018年より弟子屈町に在住。Japan Nature Guides代表。野生生物観察のコツを「①双眼鏡を携行、②ガイドを依頼、③早朝と日暮れ前、④目立たない色を身に着け、静かに動く、⑤辛抱強くあれ。生態、鳴き声、痕跡を学ぶことで野生生物を見られる可能性が増す」と指南してくれた。**2** "The Birds of Japan"（1991）の表紙は、オオワシ。**3** 名門プリンストン大学から出版された"Japan：The Natural History of an Asian Archipelago"（2022）には、日本の自然史全般が書かれている。**4** 日本の鳥についての英語版フィールドガイド"Birds of Japan"（2018）。**5** 釧路湿原国立公園、阿寒摩周国立公園、知床国立公園を軸に道東の自然を紹介した"Wild Hokkaidō：A Guidebook to the National Parks and other Wild Places of Eastern Hokkaidō"（2021,北海道新聞社刊）。

の言葉が広まるはるか前から実践していたこと。ATとは「身体的活動・自然・異文化体験のうちの二つ以上を含み、旅行者が未体験の多様な価値観に触れ、内面から変わっていくもの」である。〝Wow！ファクター〟といって旅行者にワクワク感を提供するのもお約束だ。旅行者、観光事業者、地元、環境の全てが満たされることをめざしている。

二〇一六年（平成二十八）、博士は、国土交通省北海道運輸局からの依頼で初めてATについて講演した。ATがヨーロッパ、北米、オーストラリアを中心とする富裕層に支持され、大きな市場に成長する中、北海道へのアドバイスを求められたのだ。「私は北海道の自然景観の素晴らしさはワールドクラスだと説いてきました。アウトドアでアクティビティをしている際、その背景となる景色がとても美しいです。著名な観光立国のオーストリア、ニュージーランド、スイスは北海道とほぼ同じ面積。その国々と比較しても北海道の自然は野生生物の種類が多く、見ごたえがあります。そして一年を通して、カヌー、サイクリング、登山、スキーなどの多彩なアクティビティが楽しめます。さらに、日本では公共交通機関が正確かつ安全に運行されていることも、世界と比べると大きな魅力です」。

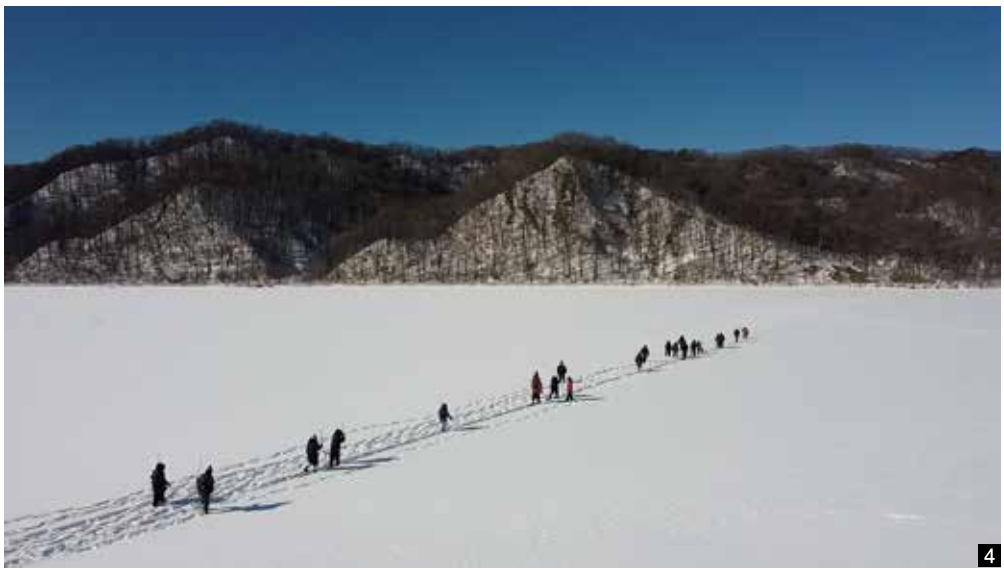
博士が国内外でガイドを担当するのは、知的好奇心旺盛な富裕層が多いそうだ。「ヨーロッパでは二～三週間、アメリカでは二週間の有給休暇が取れるのが普通です」。ATの市場規模が世界で七十兆円超とされる背景が見えた気がした。

ATの特徴に、「スルーガイド」という役割がある。「海外のガイドは英語を話せることが基本ですが、日本では残念ながらそうではありません。そこで英語が話せて、最初から最後までお客様と行動を共にし、体験を共有し、またその体験を高める手伝いをするガイドが『スルーガイド』です。訪問先で地元の方と会話するのを助けたり、ちょっと二の足を踏むようなことを後押ししたり。お客様は、不安のない状態で経験を深めることができ、『なぜ、ここへ来たのか』に、納得のいく答えを見つけられるのです」。

アイヌの狩り場を体感

昨年のATWSのプレサミット・ツアーのうち、あっという間に予約が埋まったのが、「日高〝アイヌ〟アドベンチャー」だ。その行程の一部は、㈱平取町アイヌ文化振興公社の「IWORアイヌ文化ガイド」として行われてきたものだった。「イウォロとは狩り場のことです。生活資源を採集する場である森の復元を目的とする『21世紀・アイヌ文化伝承の森プロジェクト』(※)を紹介するために考えられた企画なのです」。こう教えてくれたのは、同公社でプロジェクト主任を務める木村美咲さんだ。門別徳司さん、原田啓介さんと三人でガイドする。

まず、山に入る前に神への挨拶として「カムイノミ」を行う。山杖を持って森の獣道に分け入り、一キロ弱を二時間半かけて、アイヌが利用してきた樹木を丁寧に説明していく。イタヤカエデは材質が硬いのでマキリの柄に、イヌエンジュはチセの柱、祭具のイクパスイ、墓標に、オヒョウは樹皮から糸を作り衣服に、という具合だ。伝統的な



1 左から、木村さん、大竹さん、門別さん、原田さん。2 「カムイノミ」。イクパスイを使って行われる祭祀の目的、所作の理由について、参加者から熱心な質問が発せられる。3 ヒグマに襲われた際の武器にもなる伝統的な山杖を持って山へ。深い知恵で森を利用してきたアイヌ文化の深淵に触れる。4 凍結した「にぶたに湖」を渡って、対岸のイウォロへ。写真提供＝平取町アイヌ文化振興公社

(※)平取町・北海道森林管理局・平取アイヌ協会の協定による事業。

猟師としてエゾシカを追う門別さん。海外からの旅行者のガイドは、各国の先住民族の権利を知る機会にもなっているという。写真提供＝平取町アイヌ文化振興公社

狩猟道具の仕掛け弓を作動させたり、アイヌの子どもが遊びの中で狩猟を覚えるための弓矢を使ったり。最後に樹木の苗を植えて、参加者自ら森の復元に参加する。冬は全面結氷したダム湖の上を渡って、対岸のイウォロへ行く。

門別さんはこう語る。「都会の人が山の中に入ると、人間が本来、カムイからいただいたものでどうやって生きてきたかを、すごく感じるようです。祈りや工芸など、アイヌの生活文化を続けるために必要な材料を森から採取するのですが、育てながら使っていく現代の取り組みを見てもらいたいです。それは、自然との付き合い方を意識するきっかけにもなると思うんですよ」。

的に向けて矢を放つアクティビティ。写真提供＝平取町アイヌ文化振興公社

原田さんは、札幌大学在学中にウレシパクラブの活動を通してアイヌ文化の虜（とりこ）になった。「木村さんや門別さんと違って、アイヌにルーツのない僕はガイドに不適任ではないかと思ったこともありました。でも、アイヌ文化が好きで、札幌から平取町に移住してきた気持ちを伝えると、参加者は何かを感じてくれるようです」。

門別さんの本業は猟師だ。生業である狩猟が続けられることで、それにまつわる儀式も伝承される。「ゆくゆくは自分で英語でガイドしたいと思っています。五年後か十年後かわかりませんけど」と言い、仲間たちと英会話講座の受講を、週一回に増やしたことを明かしてくれた。

同公社総務部長の大竹孝広（おおたけたかひろ）さんは、「ガイドツアーを目当てに来町したお客様が、民芸品や特産品を購入くださることで、町の振興にもつながります」と語る。

さて今年、日高山脈襟裳十勝国（えりもとかち）立公園が誕生した。日高山脈最高

●㈱平取町アイヌ文化振興公社／平取町二風谷228 イオル文化交流センター
（現在は一般のお客様へのご案内はしておりません。）

峰の幌尻岳（アイヌ語でポロシリ）はアイヌにとって神聖な場所。ポロシリやそこから流れ出た額平川の幾つもの沢には、伝承やアイヌ語地名が数多く残っている。ポロシリを頂点とする額平川流域には、アイヌ文化の深い精神世界が広がっているのだ。国立公園の誕生で、さらなる注目が集まりそうだ。

（公財）北海道観光機構事業企画本部観光戦略部統括部長の堀田彰さんは、「ATWS後、世界から北海道に注目が集まり、詳細な説明をしなくてもすぐに商談に入っていけるようになりました。ガイドの方々の存在がたいへん大きいので来年度にはAT認定ガイドをのべ人数で百人にすることが目標です」と語る。

驚異のリピート率

二〇一八年（平成三十）から「鶴雅アドベンチャーベースSIRI」を設けてATに取り組んできたのが、鶴雅グループだ。SIRIはアイヌ語で大地を意味する。鶴雅リゾート㈱取締役アドベンチャー事業部部長の高田茂さんは、ATの第一人者。ATWSに二〇一六年から参加し、ATTA(※)アンバサダーでもある。「あかん遊久の里 鶴雅」のSIRIでは、そんな高田さんが自らガイドを務める。高田さんいわく「これまでディスティネーション（旅行先）として選ばれるには、良い建物、良い施設、美味しい料理、良い温泉、良い景観があればよかったのですが、今後はさらに進んで、なぜ阿寒へ、なぜ道東へ行かなければいけないのかという付加価値を創ることが大事だと考えています」。

ATへと誘う鶴雅アドベンチャーベースSIRI（「あかん遊久の里 鶴雅」内）。釧路市阿寒町阿寒湖温泉4-6-10 ☎0154・65・6276。なお、SIRIは道内各地の鶴雅グループに設けられている。写真提供＝SIRI

阿寒湖周辺の人気ナンバーワンは、フィッシング。諸外国では、車で数時間も移動してやっとたどり着けるような最高の釣り場に、ホテルからわずか十分で行けることに、まず、驚かれるそうだ。そしてニジマスやエゾイワナの大きさ、美しさに「Wow!」の連発だという。

長年、（一財）前田一歩園財団に守られてきた森に入るプレミアムツアーも熱い視線を集めている。財団認定森の案内人が同行する時のみ、入林が許される特別な森を歩くものだ。「ATWS後は、欧米からのお客様が増えている印象です。宿泊も長くなっています。これまでは滞在中、手持ち無沙汰な感じもありましたが、今は違います。こちらのSIRIでは国内からが七割、海外からが三割で、五年間のリピーターは四十五パーセントにも。意外なことに釧路や帯広など近場の方も多いんですよ」と、高田さん。ATは、地域の人が地域の宝を楽しむ機会も創出していることがわかる。

「Wow!」があふれる阿寒湖でのフィッシング。写真提供＝高田茂

ブラジル マーク少年がそうで

（※）世界最大のアドベンチャートラベル推進団体である「Adventure Travel Trade Association」の略。

あったように、北海道の自然は世界を魅了する。旅行者も、地元も、共に幸せを感じられる旅が、あちこちで始まっているようだ。人と人とのつながりが、北海道をますます輝かせている。 J

(上)阿寒湖をフライフィッシングの聖地にした功労者でもある高田さん。大学卒業後、カナダでオールシーズンのアウトドアを体験した後、ATの世界へ。ATTAアンバサダー、(一社)日本アドベンチャーツーリズム協議会理事も務める。(下)10月上旬に紅葉のピークを迎える阿寒湖周辺。四季の移ろいも北海道のATの魅力だ。ともに写真提供=高田茂